

徳富健次郎著

自然と人生

東京民友社發行

蘆花生簞

自
然
と
人
生

明治三十三年八月十五日印刷
明治三十三年八月十八日發行

定價金貳拾五錢



發行者 渡邊爲藏

東京市京橋區日吉町四番地

印刷者 青木弘

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所 民友社

東京市京橋區日吉町四番地

目次

灰 燼

一

自然に對する五分時

一、此頃の富士の曙……………六七

二、大河……………七一

三、利根の秋曉……………七三

四、上州の山……………七六

五、空山流水……………七七

六、大海の出日……………七九

七、相摸灘の落日……………八一

八、雜木林……………八七

九、檐溜……………	九〇
一〇、春の悲哀……………	九一
一一、自然の聲……………	九二
一、高根の風雨……………	九二
二、碓氷の川音……………	九五
一二、栗……………	九八
一三、梅……………	一〇一
一四、風……………	一〇二
一五、自然の色……………	一〇三
一、春雨後の上州……………	一〇三
二、八汐の花……………	一〇五
三、相摸灘の夕焼……………	一〇七
一六、山百合……………	一一一

一七、朝霜	一一八
一八、蘆花	一二〇
一九、海と岩	一二三
二〇、榛の木	一二六
二一、薄	一二八
二二、良夜	一三〇
二三、香山三日の雲	一三三
二四、五月の雪	一四五
二五、香山の朝	一四七
二六、相摸灘の水蒸氣	一四九
二七、富士の倒影	一五二
二八、四ッ手網	一五五
二九、田家の煙	一五九

寫生帖

一、哀音……………	一六一
二、可憐兒……………	一六五
三、海運橋……………	一七一
四、櫻……………	一七四
五、兄弟……………	一七七
六、吾家の富……………	一八二
七、國家と個人……………	一八七
八、斷崖……………	一九〇
九、晚秋初冬……………	二〇一
一〇、夏の興……………	二〇六
一一、雨後の月……………	二一九

湘南雜筆

- 一、元旦……………二五七
二、冬威……………二五八
三、霜の朝……………二六〇
四、伊豆の山火……………二六二
五、霽日……………二六三
六、初午……………二六六
七、立春……………二六七
八、雪の日……………二六九
九、雪の明くる日……………二七一
一〇、初春の雨……………二七三
一一、初春の山……………二七五

一二、三月節句	二七七
一三、春の海	二七九
一四、彼岸	二八一
一五、伊勢參宮	二八三
一六、磯の潮干	二八六
一七、沙濱の潮干	二八九
一八、花月の夜	二九四
一九、新樹	二九六
二〇、暮春の野	三〇〇
二一、蒼々茫々の夕	三〇二
二二、夕山の百合	三〇四
二三、梅雨の頃	三〇六
二四、夏	三〇八

二五、涼しき夕	三二〇
二六、立秋	三二二
二七、迎火	三二三
二八、舟を川に浮ぶ	三二五
二九、夏去り秋來る	三一六
三〇、秋分	三一七
三一、鰯釣り	三一九
三二、海と合戦	三三三
三三、秋漸く深し	三五七
三四、富士雪を帶ぶ	三五九
三五、風	三六一
三六、風の後	三六三
三七、月を帶ぶ白菊	三六五

三八、暮秋	三六六
三九、透明、凜然	三六七
四〇、秋晩の佳日	三六八
四一、時雨の日	三七三
四二、寒星	三七四
四三、寒月	三七五
四四、風の湘海	三七七
四五、寒樹	三八〇
四六、冬至	三八一
四七、歳除	三八二
風景畫家：コロオ	三八三

灰 燼

(上) の 一

勝てば官軍負けては賊の名を負はされて、思ひ出づれば去ぬる二月
 降り積む雪を落花と蹴散らして魔城を出でし一萬五千の健兒も此處
 に傷き彼處に死し、果ては四方より狩り立てらるゝ怒猪の牙を咬む
 でこゝ日州永井の一村に楯籠りしが、今は彈盡き糧盡き、勢盡きて、
 大方は白旗を樹てける中に、せめて一期の思出に稻麻竹葦の此重圍
 をば見事蹴破つて、我此翁と故山の土にならばやと、残る一隊三百

餘人、草鞋の紐緊々と引しめ、明治十年八月十七日の夜をこめて月影闇き可愛が嶽の山路にかゝりぬ。

小荷駄をば一切取り棄てつ。各自に糧囊を帶び、銃を提げ、大刀を

釣り、松明も點さず、言はず。土人を案内として桐野真先に立てば、

薩摩緋の單衣に紺染の兵兒帶一尺餘りの小脇差を腰にぼつこみ尻高

々どからげて煙草吸ひく中軍をうつ南洲、村田貴島別府河野野村

山野田坂田増田の諸將前後を擁し、殿には逸見の一隊。假令鐵壁に

もあれ、我前に立たん程のものは蹴破つて行かむものと思ひ込むで

は、坐ろに打咲まれつ。

進軍を決したるは午後四時。先鋒已に可愛が嶽の麓にかゝれば、夜

は闌ふけて星せい河か一てん天てん、山やま黒くろくして月つき幽ゆうに、風ふう露ろ肌はだに冷ひややかなり。敵てきも
 眠ねらず、見みよや、山やま又また山やまに燃もし列つらねたる篝か火り點び々てんとして星ほしを欺あざむき。
 左さ右いうの嶺みねより敵てきの哨せう兵へいが探さぐりうつ銃ちゆう聲せいは斷たへ間まもなく呀こたまに響ひびく。絶ぜつ頂ちゆう
 までは二に里りにあまる、夜よ明あけぬ間まに急いそげ急いそげど、嶮けん岨その夜よ道みち山やま路みち事こと
 ともせず、今いま後こう隊たいの一人ひとりが岩いは角かくに足あし踏ふみ込こまして谷たにに落おちしをも知し
 らで、六む百ひゃくの草わら鞋んじ宛さながら「明あけぬ間ま、明あけぬ間ま」と囁ささやき、谷たにを陟わたり
 峯みねを攀よぢ、青あを葉は落おち葉はをかき分わけ踏ふみ分わけ、次し第だいに上のぼり上のぼり上のぼり――
 月つき傾かたむきて、短みじ夜かよの明あけんとす。

(上) の二

短夜みちかよの月傾つひかたむくと思おもへば、何時いつか山やまの端白はしらみ、曉寒あかつきふゆき風かぜにほろく
と滾こぼるゝ葉末はせえの車しづく、未だほの闇ぐらき谷たにの岩いわが根ねに倒たふれし男おとこの頬ほを傳つたふ
て自づから口くちに入いれば、唇顫くちびるふるひ、手足動てあしうごきて、何かなには知しらず唸うなやき
しが、忽たちまち

「阿母おつかさん、唯今ただいま——」

瞭然はつきりと呼よぶ吾聲わがこゑにはつと眼めを睜みひらき、やをら起おき上あつて四邊見廻あたりのまは
し、空打仰そらうちあをぎて吻はつと一息ひといき、

「歸かへる、歸かへる——と思おもつたが——矢張先刻落やっばいさつきおちた儘氣絶なまきしちまつた

んだな。——あゝ最早黎明だ」

舌鼓打鳴らして、立上り、腰のあたり五六つ打たゝき、手をふり、足を踏み試み、其處ら探して落ちたる銃を採り上げ、行かんとして、忽ち山の端遠き咄喊の聲に耳傾けしが、

「やつ、後れた！」

叫びもあへず、手早く草鞋の紐しめ直し、背負へる大刀をゆり上げ、滑る足を踏しめく、木の枝傳ふて谷間を攀ぢ上りぬ。

十歩行きては立どまり、二十歩上りては耳を傾け、谷を陟りて嶺にかゝれば、夜はまさくと明け離れて、萬山の朝靜かに、やがて朝日杲々とさし上りて、山鳥の聲其處此處に聞へたり。赤松の根に銃

を杖つきて、息つきあへず、屹と耳を澄す。年は十八許、面瘡せて見ふれど眉目清らに、垢染みたる洋服の上に白木綿の兵児帯して、脚絆草鞋に身を固め、網袋と草鞋一足腰につけ、太き眞田の紐もて朱鞘の太刀を肩より釣りたり。

良久しく耳傾けしが、物音はつたり絶えたるに、失望の色顔にあらはれ、

「些も聞へん——最早破つたな。つゝ、後れた、後れた。たしか三田井に出るんだつたが、三田井と云ふは何方か知らん」

力なげに呟やきつゝ、不知案内の山路足に任せて十町あまり上れば、山いよく静かになりぬ。唯一度、仄かに銃聲の響ける様に思ひし